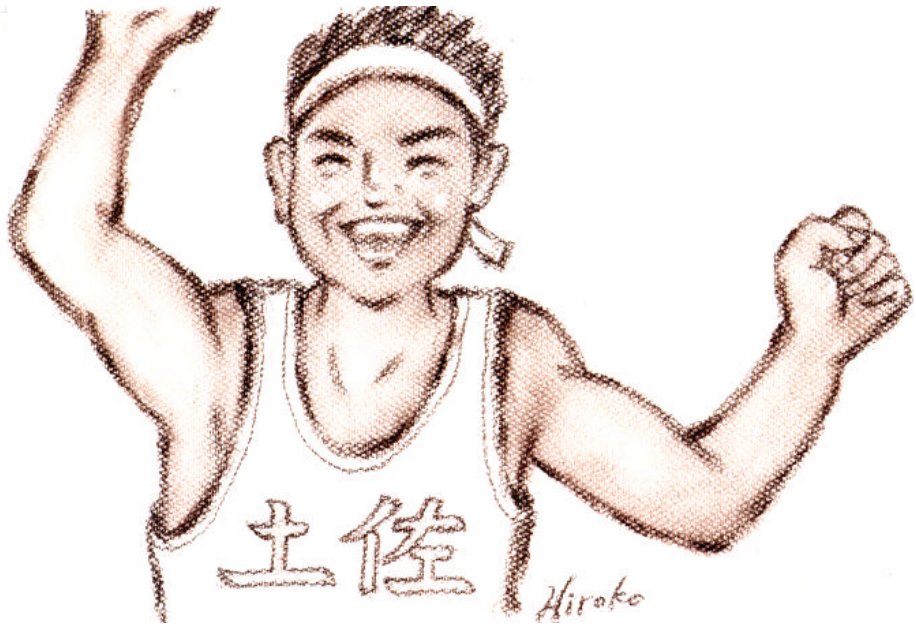
筆山

第34号／2003年7月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報　　編集人/西岡 恒憲（41回）

〒251-0875 藤沢市本藤沢7-3-7 山中和正(24回)気付　事務局長 金澤由里(55回) TEL&FAX 0466-82-2445
E-mail：tosako-kantoshibu@mail.ne.jp　　関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/



共に笑った日々があった。共に泣いた日々があった。青春の日々。・・・・忘れない。〔佐々木泰子（33回）画〕

かつての私たちへ

竹村　佳奈（67回）

思春期の多感な頃を想うとき、〈土佐中学・高等学校〉その名が刻まれた、赤いレンガの門が浮かぶ。真っ青な空の下、その赤い門をくぐれば、静けさと遠くに聞こえる歓声とが共鳴し合っている。

確かに、私たちはそこに存在していたのだ。

あの頃の感情を身体が覚えている。言葉では言い表すことができないけれど、切なさに似た感情に包まれていた。空を見ること、川の音を聴くこと、語り合うこと、ヘッセの本を読むこと、Rockを聴くこと、思いっきり身体を動かすこと、世の中すべてが学習だった。得体の知れないもやもやした気分に怯えつつも、思春期特有の不安定さに陶酔していた時代。無邪気で凶暴な生きものたち。それが、私たちだったのではないだろうか。

数年前に、同窓会に出席した。あの頃の土佐校生たちは、それぞれの人生をしっかり歩いていた。知らない顔になって、会社に行って仕事をしたり、親になって子供を叱ったりしている。運動会のやぐらやホームゲーム・向陽祭の準備に、明け方学校に忍び込んだこと、夏の甲子園大会、挨拶代わりにエピソードをひとつ。すると、みんな、すぐに馴染みの土佐校時代のそれになる。

卒業から12年。私たち67回生は、今年で30歳になる。土佐中・高校で過ごした、6年という時間の重さをひしひしと感じながら、想い出を語る。そして、懸命に駆け抜けて、遠い場所へと旅立ってしまった友を心の中に抱いて、偲び、悼む。

今、この瞬間にも、赤い門の向こうでは、さまざまな「青春」が交錯しているだろう。土佐校生という束縛の中で、たくさんの夢を見ているだろう。そして、いつか巣立っていく。

かつての私たちがそうであったように。

平成15年関東支部総会・大懇親会

平成15年度土佐中学・高等学校同窓会関東支部総会及び大懇親会は6月7日（土）オリンピック記念青少年総合センター「国際交流棟」に於いて開催されました。二八〇名余の同窓生が代々木の森に参集し盛大に挙行されました。

母校からは、池上武雄校長先生をはじめ、今年4月より母校野球部監督に就任された高多倫正先生、小村彰先生、松村誠先生にお見え頂きました。

池上先生の学事報告

中谷元氏の講演

今年の記念講演は衆議院議員で前防衛庁長官の中谷元氏（51回）の「日本の安全保障について」と題する講演でした。

今年は3の回生（23、33、43、53、63、73）の同窓諸氏による総会・懇親会の運営がなされました。

懇親会では、アトラクションとして、昨年5月ガーナで開催された『ガーナでよさこい』祭の現場報告が、浅井和子大使（35回）の御夫君の浅井伴泰さん（30回）や35回生の同級の方々からありました。そのあと、大塚寿昭さん（43回）が理事をされている「人祭会」の関東の中学生によるよさこい踊りが披露され、会場全体を大いに沸かしました。

大懇親会

宮地支部長による来賓紹介

司会は73回生と63回生

壇上では新卒業生の78回生が紹介された

乾杯の音頭は森健氏（23回）

野球部新監督高多先生の挨拶

「ガーナでよさこい」の現地報告

関東の中学生によるよさこい踊り

今年の総会も校歌の熱唱で幕を閉じた

3の回生から4の回生への総会幹事引継式

アクラの空に鳴子が響くフラフがなびく　―ガーナ　よさこい祭　報告―

溝渕　直清（32回生）

35回生が走る！人が、心が動く！

「国としての経済貢献や政府高官の交流も必要だが、国民同士が楽しめるような交流も大切だ」として、「日常生活から踊りが切り離せないほど踊り好きのガーナの人々に『よさこい』を踊ってもらおう」と浅井和子駐ガーナ大使（35回）は二〇〇二年のジャパンウイークの目玉として「ガーナ版よさこい祭」を企画した。

「意気に感じた」35回同期の中田昌志、中村明裕、公文敏雄さんらは同期の仲間に働きかけ、古谷俊夫先生を代表に「ガーナで〈よさこい〉支援会」を結成する。県、市、観光協会、企業、学校などの団体にも参加、協力を要請。寄付金集め、鳴子、踊り手の衣装、はっぴ、フラフなどの援助物品の調達に奔走し、成果をえた。しかし、それだけでは、心もとないと考えた支援会は「ガーナで〈よさこい〉を踊らんかいツアー」を企画し、参加を募った。土佐高ＯＢ家族を中心に22名が参加、大使の夫君伴泰さん（30回）は現地で参加、大奮闘された。

ガーナでは、首都アクラを中心にガーナ議会を訪問、与党の代表を表敬訪問し、ジャパンウイーク、〈よさこい祭〉をＰＲ。

「踊っていると、神様と一緒になれる」

パワー炸裂、汗が飛ぶ！

会場は高知市営球場ほどの公園、土佐高、同窓会本部、関東支部の旗がはられ、高知のフラフがゆれている。テレビカメラ用のクレーンが動く、三〇〇〇人の好奇の目が光っている。ツアー参加の我々は当日早朝の特訓だけのへっぴり腰スタイルで、プログラム最初に登場、とにかく広い会場ゆえ、後半は息を切らせ、ふらつきながらも、国際文化交流の使命をまっとうすべく、笑顔で頑張る。日本人会、現地日系企業チームが競って、一生懸命、そして楽しそうに踊る。

突然、よさこいのメロディーをかき消す大小の太鼓の響き、激しいリズムに肌が震える、これが、アフリカン・リズムというものなのか。いよいよ、コンテスト参加の８チーム五〇〇人が鳴子を両手で打ち鳴らし、激しく体を揺すり、裸足は土をけって、砂ぼこりを上げながら登場。太鼓の音と激しい踊りに圧倒されそうである。

あれえっ！ここほどこだっ？と一瞬、変な気分になる、よく見れば、各チームはそれぞれ土電グループ、高知大学、高知銀行、大旺建設などの名前が染め抜かれた衣装をつけているではないか。

日の丸とガーナの国旗が走りまわる、とおもえば、ポールによじのぼり、両国の親善をアピールする。ガーナ人は葬式でも皆で踊るほど踊りが好きとは聞いていたけれど、実際、遺伝子にすりこまれているにちがいない、と思えるほど、リズム感、スピード感、パワーが身体に満ちている。そして、ひょうきんでもある。かれらのリズム感覚、身体運動能力の高さ、パーフォーマンスのセンスは日本人には「驚嘆」の一語につきる。人間ドミノ倒しやごろごろ、クルクル転がって喜びを表現する動きも愉快だし、アクロバチックな動きも得意らしい。そういえば、街中で肥満の人に出逢ったことがない。なぜだろう？太鼓の音は更に激しく打ち鳴らされ、止むことはない。

『　良い世さ来い　』

国友須賀チームがプロフェッショナルな〈よさこいダンス〉を披露し、大喝采とどよめきの中での国友さんのスピーチは涙させられた。『「よさこい」とは「良い世さ来い」の意味です。』

Good opportunity has come,
Good world has come !!.
Happy opportunity has come,
Happy world has come !!.

病みあがりの身体を押して、激しく踊り、足を踏ん張り、手を精一杯に突き上げて、絶叫したシーンには鳥肌がたち、胸が熱くなった。

高知大学留学ＯＢ氏は、大会の司会を進める中で「高知大学は日本でナンバーワンの大学である。最も有名な大学である。」と叫んでいたのもほほえましかった。日本人会、駐在日本企業、日本への留学生ＯＢの人たちの協力、活躍はうれしく、頼もしく思われ、感謝であった。

ツアーに参加の森本尭士教頭は現地の優秀校、セントピーター校を表敬訪問されたが、帰国後、両校は今後、交流を深める約束がされたという。

最終日、大使主催のフェアウエル・パーティーの途中、大統領、Ｇ８国大使との会合に出席する浅井和子さんを見送った際、『行ってらっしゃい、頑張ってよ』と声をかけながら、良き後輩をもつ誇らしさとガーナまで来て良かったという充実感を味わうことができた。

（追記）

＊ガーナ「よさこい」支援会は『日本・ガーナ交流会』に名称を変更された。

＊二〇〇三年の「ガーナよさこい祭」は11月15日（龍馬記念日）に決定。第2回ガーナ・ツアーが計画される。

＊「ガーナ〈よさこい〉」の詳細は高知新聞のホームページで見られます。

お問い合わせ先：ガーナよさこい交流会　会長　古谷俊夫　高知市本町2-2-31　サンライズホテル内
TEL088-822-1281 FAX088-822-1282　Email：sunrise@fm.inforyoma.or.jp　(公文敏雄)KumonT@aol.com

関東支部活動報告

事務局長　金澤由里（55回生）

皆さまこんにちは。高知のまぶしい太陽が恋しい季節となりました。事務局からは、今年前半の活動と、後半から来年に向けての予定を簡単に報告させていただきます。

新年になりまして、恒例の筆山会が1月16日（木）に開催されました。今回は、昨年12月にガーナでよさこいを踊っていらした方々の報告なども織り交ぜて、70回生まで集まり、にぎやかな宴となりました。

2月8日（土）には、学年幹事会を開催し28名の学年幹事が集まり、定例の議事のほか、母校への提言などについても話し合われました。そして、この会議の前には、3の会がスタート致しました。

6月7日（土）、この3の会によって、約4ヶ月かけて準備した総会、懇親パーティーが盛会裏に終了いたしました。総会、懇親パーティーの参加者は、二八一名でした（社会人二〇九名、同伴者7名、学生38名、新入生27名）。

23回生をはじめとして73回生までの10年毎の同窓生が、この日のために、4ヶ月にわたり5回の準備会を開催致しました。一つ一つの事柄を熱心に討論し、終了するのはいつも21時すぎとなりました。また、交わした書簡（ＭＬ）は四〇〇通を超えました。総会終了後の四三七番目のメールを引用致します。「33回Ｍです。総会よかった・・・。両先輩、会を締めて頂きありがとうございました。Ｏ君、43回生諸君、人祭会よかった。感動した。来年からは43回の女性の方も参加させてください。（しつこいか？）Ｋさん、全体をまとめてくれてありがとう。まごまごしている私等をテキパキ指示してくれてありがとう。33回生を懇親会に出られるよう、53回生に受付を交代するお気遣いありがとう。53回生諸君　酒も飲めずに申し訳ない。63・73回生諸君、大変な懇親会を取り仕切ってくれてありがとう。その他の一人一人にお礼を申し上げたい。」

事務局も、行事が目白押しの年前半から、穏やかな後半へと入ります。

9月には、幼い頃両親が海水浴に連れて行ってくれた美しい柏島、その海の風景がたくさん出てくるという『釣りバカ日誌14』が公開されます。シーマンの言うとおり、「どーせ、ＴＶで放映するでしょ！」と思っておりましたが、今回だけは映画館で鑑賞しようと思っております。皆さまもこれを機会に映画館に足を運んでみてください。

若手の会は10月4日（土）の予定、年が明けまして、学年幹事会は1月31日（土）に決定。総会は6月5日（土）の予定をしております。下一桁4の回生の皆さまが、どんな企画、どんなメンバーでの運営になるか今から楽しみです。24、34、44、54、64、74回生の皆さま、どうかよろしくお願い致します。

そして、来年は3年に1度の関東支部名簿発行の年でもあります。同窓会名簿の正確性は活動をする上で、とても重要な要素です。お手元に届いた住所に間違い、お気づきになったこと等がありましたら、事務局までご連絡ください。

今後とも同窓会の運営にご協力を心よりお願い申しあげます。

母校だより

学校長　池上武雄（28回生）

向夏の候、関東支部の皆々様には益々お元気でご活躍のこととお慶び申しあげます。

昨年4月、母校校長を拝命して以来あっという間に一年が過ぎました。森本、浜田両教頭先生をはじめ教職員の皆さん、振興会、同窓会の多くの方々に支えられて無我夢中で過したこの一年を振り返ってみて、唯々我身の未熟さを痛感するのみです。

このことが本年度の大学入試にも影響した結果となったことを大いに反省しているところですが、本年度入試の合格者は、国公立一三九（現九〇）私立三九一（現一八二）で、現役生の合格率は、66％（昨年比▼6％）でした。東京2（現2）京都9（現2）大阪18（現15）と大阪を除いては昨年を下回りました。ただ医学部では、国公立22私立9合計31と健闘が目立っております。

今年の成績からみて、やはりセンター試験で良い成績を挙げることが必勝の条件だということです。その反省に立って来年は大いに頑張らせたいと改めて決意しております。

昨年秋からの主な慶弔事として、秋の叙勲で、北村旦先生（18回生、阪大名誉教授、元関西支部長）が勲三等旭日中授章を受章されました。誠におめでたい限りでした。

11月23日、かねてより病気療養中の籠尾良雄先生（27回生、元教頭、野球部元監督）が、続いて11月30日、「平城山」「とんぼのめがね」などの作曲家平井康三郎先生（5回生）がご逝去されました。謹んで両先生のご冥福をお祈りいたします。

籠尾良雄先生については、昭和60年1月、関東支部総会で「土佐高野球部復活を願って」の大激励を皆様からいただき、平成元年、14年振りに夏の選手権大会で見事甲子園復活の約束を果たされたことが懐かしく思い出されます。

なお、本年4月から新しく野球部監督に高多倫正先生（47回生、社会科、土佐―慶應―住友金属工業）を迎えて、三木―高多体制が組まれました。皆様にお約束した甲子園復活もそう遠くはないと確信しております。一層のご支援

をお願いいたします。

この欄をお借りして御礼を申しあげねばならぬことが二つございます。一つは、3年目を迎えた高1生の修学旅行（10コースに別れたコース別研修）についてであります。ご多忙の中をご協力賜わりました先輩の皆様に心から感謝を申しあげます。生徒達はご恩に報いるようこれからの精進を誓っておりますことを申し添えます。二つ目は、週刊朝日（6月3日号）に掲載の「シリーズ進学の源流を訪ねて―日本の名門高校ベスト一〇〇私立高校編」での本校記事欄についてであります。同窓生の皆々様、関係会社など数々の協賛広告のご協力を賜わりましたこと有難く厚く御礼申しあげます。ただ広告のお願いについて色々とご迷惑をお掛けしたやに聞いておりまして誠に申し訳なく深くお詫び申しあげます。

最後に会員の皆様のご健勝とご活躍、関東支部の益々のご発展をお祈り申しあげ近況報告とさせていただきます。

本部だより

副幹事長　西山彰一（48回生）

山の緑がとても鮮やかで、自然の営みの力強さを感じさせる頃となりました。同窓生の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

昨年のよさこい高知国体とよさこいピックの開催そして待望のルイヴィトンの開店以来、まちがとてもきれいになったと喜んでいただき、高知に住む者の一人として、とても嬉しく思います。多くの皆様のご尽力による成果が多方面でのボランティア活動や地域づくりの活動に広がりを見せていることは、大切な地域の財産であると思います。

さて、同窓会本部におきましては、同窓会名簿の更新手続と総会に向けての準備を進めております。名簿印刷が出来上がった時点ですでに同窓生の住所が変更していることもあり、名簿による会員の住所情報の精度には限界がございました。去る、4月19日、本部にて支部の皆様のご出席をいただき、懸案の課題である、同窓会名簿の住所変更などの処理と最新の情報のやり取りについて協議の場を持ちました。

ご出席者は関東支部より、市川直介さん、川上司さん、東海支部より南毅一さん、関西支部より原田和人さん、広島支部より門田佳代さん、香川支部より野村喜久さんであり、本部より池上会長、安岡幹事長、千頭裕さん、西山が出席いたしました。その結果、支部の皆様のご協力をいただきながら、本部で名簿に係わる情報の一元管理をすることで進んでいます。貴重なお時間とご意見をいただきました支部の皆様に、この場をお借りし、心から感謝申し上げます。

同窓会の総会は8月2日開催で、現在、記念講演の準備と運営次第の作成などを進めております。全国からお越しいただく会員の皆様に、高知の楽しさを満喫していただけるように、旬のおいしいお料理をご用意しお待ちいたしております。今年はよさこいまつり50周年の年で、電車通りの一部を使って、迫力のある踊りをお楽しみいただけるとの事です。

母校の近況といたしましては、広報活動の充実が図られ、新年度より、二人の教頭先生と小村先生を中心に8名の先生方が担当されることになりました。心の通う広報活動を通じてより多くの皆様に母校の目指すもの・実践していることをよりわかりやすい形でお知らせできる事で、土佐高校の教育の充実と社会への貢献を目指し日々前進をされております。百周年に向けて精力的に学校の運営、教育に取り組む諸先生と職員の皆様のご健闘に、心からエールをお送りいたしたく存じます。

東海支部だより

倒・M徳義塾同盟成立!!

事務局長　南毅一（37回生）

市商がM徳義塾に勝ったとな…。春季卓大会とのこと。この春一番の朗報と市商ＯＢ大感激。甲子園出場とは関係ナシと言えども、ひとときの美酒に酔った。名古屋駅前のとあるホテルの宴会場であった。

実は、同ホテル、同フロア、同時刻、同料理、同料金、同キリンビール、ほぼ同人数で、

土佐と市商の東海支部の同窓会総会を開いた。両校幹事が事前に相計らって段取りした。
イヤー、なつかしかった。出席者もみんなビックリしていた。関東支部より出席下さった市川幹事長も「僕らの頃も市商は強かった・・・。」と大きな眼をさらに大きくしていた。両校同窓会の支部長が各々の部屋を訪問、エールの交換をしたり、会報誌を披露し合ったりで・・・。最後には土佐池上校長、市商柳井校長が、それぞれの同窓会の出席者の前であいさつ、ガッチリと握手をかわし健闘を誓った。「市商より先に甲子園に行きます。」と池上校長。「ナンチャジャナイ。この夏は市商で決まりです。」市商の柳井校長も負けていない。いずれにせよM徳義塾だけには出てもらいたくないの気持ちで一致。ここに倒・M徳義塾の密約が成立した。時に平成15年5月24日晴天、夕刻であった。アトは選手に頑張ってもらうだけだ・・・で閉会した。

いつもながら、19回生窪田善一先生よりの差し入れの小夏をもらって帰った。しかしその後も両校のエールの交換は名古屋の夜の町に続いた。小生が帰宅できたのは翌朝3時であった。もらった小夏は行方不明になっていた。ホント疲れた・・・。

新たに東海支部長として久保地理介（33回）が総会にて選出され、前支部長の大高坂秀雄（31回）は顧問に就任されました。

関西支部だより

事務局長　原田和人（56回生）

関東支部の皆様、こんにちは。関西支部では今年の1月25日（土）、恒例の支部総会・懇親会を神戸のホテルオークラで開催致しました。当日は母校の池上校長をはじめ、同窓会本部・各支部からの多数のご来賓とともに、総勢一三〇余名の方々にご参加頂き、前年のザ・リッツカールトンホテルでの開催同様活気あふれる開催となりました。また、今回は当日飛び入り組み含め16名もの学生の参加があったことで、会は更に盛り上がりました。

さて、総会では川﨑美栄子関西支部長よりご挨拶を頂いた後、平成14年度の活動報告・会計報告があり、承認されました。続いて午後5時半より遠路高知よりご参加頂きました中澤節子先生の乾杯で懇親会が始まりました。午後7時半を過ぎたところで恒例の『よさこい鳴子おどり』が始まりました。これは高知から本格的な踊りの先生をお迎えしての毎年皆が楽しみにしている企画です。全員参加の踊りで会場は熱気の渦につつまれました。その後応援歌を歌い、北村旦（元）関西支部長の挨拶を頂きました。開催予定時間の2時間は、盛り上がりの中あっという間に過ぎてしまい、30分延長の後、午後8時に閉会しました。

来年二〇〇四年度の関西支部総会・懇親会については、昨年は大阪、今年は神戸と開催して参りましたので「三都物語」の最後を締めくくるべく京都での開催を予定（1月24日（土）午後5時、京都ホテルオークラ）しております。京都の観光を兼ね、関東支部の皆さんのご参加も心よりお待ち申し上げております。

最後になりますが、事務局は今年の2月の幹事会で長年にわたり関西支部の事務局を一手に引受けてこられました中山事務局長（46回）より56回の原田へ引継ぎをさせて頂きました。中山事務局長の功績が大きかっただけに、プレッシャーもありますが、皆様のご指導ご鞭撻を賜りながら、精進していきたいと思います。どうか宜しくお願い申し上げます。

広島支部だより

事務局長　山崎迪子（40回生）

緑紅に映ずる頃、関東支部の皆様今日は。

昨年の広島支部総会は関東支部から講師として浜田英生先輩（37回）をお迎えし、盛大に行う事が出来ました。翌日の江田島ツアーには浜田先輩はもちろんのこと41回の皆様多数のご参加をいただき有り難うございました。江田島では村田章夫氏（41回）の御案内で「同期の桜」の歌を作った方が記念に植えられたという桜の前で記念写真を撮ったり、普通の見学コースでは行けないところにも案内していただきました。

旧海軍兵学校の売店では自衛隊グッズや昔から有名な江田島羊羹が売られておりました。この江田島羊羹は現代の味にしたものと戦前からの昔ながらの味のものとあり、昔からの江田島羊羹を買って兵学校出身の伯父に送りましたところ「昔の味だ」と懐かしがっておりました。私の亡くなった母はこの江田島羊羹が大好きで伯父が兵学校から休暇で帰るたび買ってきてくれるのを楽しみにしていたと申しておりました。

今、有名になりつつあるものの中に「海軍さんのカレー」がありますが、今も海上自衛隊に受け継がれており、各護衛艦によってそれぞれのカレーの味があり味を競っているそうです。

さて、今年の広島支部総会ではまたまた関東支部より山中和正先輩（24回）を講師としてお迎えする予定です。「世界遺産のお話」と伺っており今から楽しみに致してお

ります。世界遺産といえば広島にある世界遺産の一つ宮島の厳島神社の大鳥居が今年10数年ぶりに塗り替えられ、きれいな姿が海に映えています。

厳島神社のお祭りでは管絃祭がよく知られておりますが、夏は水中花火もきれいです。厳島神社の近くで行われ、瀬戸内海にも花火が映り、神社がとても美しくみえます。秋は紅葉が素晴らしく、紅葉の時期に宮島で支部総会ができればと考えないでもありませんが、仲々うまくいきません。

もう一つの世界遺産地域にある原爆資料館には一度行きましたが、つらくてそれ以後人を案内することはあっても中にはいることができません。

今年の支部総会は10月25日（土）の予定です。紅葉の季節には早すぎて宮島の紅葉は今年もお預けですが、皆様のお越しをお待ち致しております。

香川支部だより

幹事　萩野友康（44回生）

純白のユニホームが甲子園から遠のいて10数年が経ちました。昨今卒業生から野球部の実状を問われることが多くなってきました。又、昨年11月に籠尾先生がご逝去され落胆と共に野球部が弱くなっているのではないかと危惧されていることと思います。そこで私の見た分析と甲子園への道を述べさせていただきます。

現状の活動状況ですが三木部長、高多監督、部員数43名（1年生14名）、今年の成績は1勝10敗。3年生に故障が多く苦戦しています。今年から監督が交代しました。高多監督は3月後半より住友金属を退職し母校に着任しました。籠尾先生の弟子の中でぴか一の最適任者であり、籠尾先生も熱望していた人物です。かつての強い野球部を実現してくれるものと確信しています。勝つ指導者が整ったことでこれからが甲子園へ誰とどのルートでいつ行くかということを述べます。いつは決まっています。籠尾先生の三回忌まで。

まずは気になる戦力面ですが今は成績からみても話になりません。但し、1年生に甲子園に行ける有望な選手が数名います。甲子園への条件の第一は絶対的なエースとサブ投手の如何です。1年のM投手は右上手投げでエースの器です（私から見てもほれぼれします）。左のT君と右のT君の2人がサブとしています（これもグー）。次に攻撃陣ですが。甲子園へは最低条件として5人の打てる打者が必要です。今はいません。但し、該当者はこれも1年生に3人います。あと2人発掘し育てることとなります。以上でお分かりとおもいますが、やっと甲子園へ行ける戦力が整いました。（池上校長に感謝）

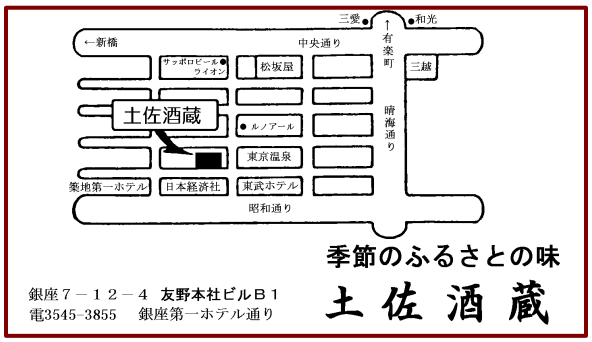
ここからが高多監督の手腕です。長短期の計画と実行（徹底した英才教育）を確立し、体力の向上と基本技のマスターそして甲子園を意識したメンタル面の強化を着々と行っていくことでしょう。

勝負の時期は秋の予選。四国大会には一県から3チームが出場します（一昨年までは2チーム）。ここで1勝以上をもぎ取り甲子園へ。夏は明徳がいること。秋は他高校が新チームになって戦力が整うのが遅くなること。土佐は英才教育で戦力充実。後は運があるかないか。明徳と別のゾーンに入る組合せの妙とかセンバツ委員の評価他あるがこれは結果論であり、女神を引きずり込む実力と執念があれば必ずや純白のユニホームが甲子園を駆けめぐってくれます。そう信じています。

5月に籠尾先生の納骨式がありOB一同甲子園出場を墓前に誓いました。6月には高多監督の奥さんも高知に引っ越してきます。やっと甲子園への道のスタート台に着きました。高多監督には苦しく大変な甲子園への道ですがどのルートでもいいから実現してほしい。私もOBの一員として支援をしていきます。母校に栄冠を。

追伸

甲子園出場時には寄付金をガッポリいただきます。



[母校及び同窓会本部・各支部一覧表]

土佐中学・高等学校／土佐中学・高等学校同窓会本部　会計幹事　千頭裕　〒780-8014　高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394(FAX)088-833-7373(E-mail)tosa@tosa.ed.jp(HP)http://www.inforyoma.or.jp/tosaobog/

土佐中学・高等学校同窓会香川支部　事務局長　武山正人（担当：野村喜久）〒760－8573　香川県高松市丸の内2-5四国電力(株)
(TEL)087-821-5061(FAX)087-826-1074(E-mail)nomura11741@yonden.co.jp

土佐中学・高等学校同窓会広島支部　事務局長　山崎迪子　〒732-0062　広島市東区牛田早稲田1-24-7-210
(TEL)082-227-2656(FAX)082-732-0062(E-mail)myamazaki@do2.enjoy.ne.jp(HP)

土佐中学・高等学校同窓会関西支部　事務局長　原田和人　〒530-6001　大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内
(TEL)090-1073-7822(E-mail)harada73@hotmail.com(HP)http://www.tosa-ko.org/kansai/

土佐中学・高等学校同窓会東海支部　事務局長　南　毅一　〒460-0024　名古屋市中区正木3-13-13ビル新金山1階
(TEL)052-332-3370(FAX)052-332-3372(E-mail)knz@mta.biglobe.ne.jp(HP)http://www.sun-inet.or.jp/~bunmura/

インターネット古書店「五台山書房」店主　鍋島高明さん（30回生）を訪ねて

鍋島高明さんプロフィール
高知市生まれ。土佐高校、早稲田大学政経学部卒。日本経済新聞社に入り、商品部の記者として活躍。退職後は日本橋蛎殻町に市場経済研究所を設立。代表取締役。
自宅にインターネット古書店「五台山書房」を昨年7月より開設。

毎日本屋に入らないと気持ちが悪い。
高校時代に友人が芥川賞、鍋島さんは直木賞をとると分担を決めて上京した。大学に学びつつ執筆を続けた。友の様子をみに行くと原稿用紙に「目次」と書いたままだった。「おい、小説に目次ってのがあるのか？」
野坂昭如に惹かれ、井上ひさしを貪り読み、早稲田の古本屋街は毎日歩いた。以来「一日に一度は本屋にはいらないと気がすまなくなりましたよ」と本の虫になった。

入れば買う。で、これまでの蔵書は二万冊を超す。自宅近くの仕事場兼書庫のマンションは風呂場まで本に占拠されている。
ネット販売ではそのうちの一部三千冊ほどを売りにだした。残りはまだまだ手放したくない。
「売れると寂しいような、複雑な気持ちで、未練のある本には自然と高い値段をつけてしまいますね」
娘を嫁にやるような気分なのかも知れない。
一周年では記念の大バーゲンを予定している。
売れてほしいのか、残ってほしいのか、値段の設定には本マニアの古書店主としては大いに悩むことになりそうだ。
その鍋島さんを筆山編集部若手女性記者3人が突撃インタビュー。

〔編集部宮村記〕

山崎　寛子（76回生）
現在所有する本は二万冊。書庫にと手当てした9坪のマンションは風呂場まで本で溢れているというほどの収集家とは、どのような人物か。好奇心で胸をいっぱいにして鍋島さんを訪ねた。

お会いして最初に、「それがねぇ、本の売れ行きは上々なんですよ。」と、とても嬉しそうに教えて下さった。また、「ほら、よく売れてもないのに景気付けのために『完売御礼』と出すじゃないですか。私のは全部ホントなんですよ。」と、娘さんの協力を得て作成しているホームページのコピーを見せて下さった。
なるほど、平均価格は四、五百円程度で高い本でも三千五百円、神保町よりも安くしているという価格設定の中、昨年7月に開店して以来、売上げが30万円を超えているというから、なかなかの売れ行きである。
しかし、売れ行きよりもっと嬉しそうに語ってくれたことがある。それは購入希望者とのやり取りである。中でも、関西の大学生がゼミの授業で使うからと、同じ本に対して5人もの学生から注文があったと語る鍋島さんの表情は、とても印象的であった。
そして何よりも、本の配達は迅速かつ丁寧に、仕事を終え、帰宅し注文を確認するなり、今度は奥さんの協力を得て、夜のうちに即梱包、ポストへの投函を行っていると言うから驚きである。「自分も収集家だからこそ、注文する人の気持ちが良く分かるんです。」と言い、休日になるとリュックサックを背負い、自分の好きな本のみならず、今では問い合わせのあった本まで探しに行っていることを教えて下さった。
「古本屋へ売ることもできるが、書房をやっているのはお金のためではない。本の気持ちを考えて、自分の希望をお客に認めてもらい、そしてその本を本当に必要としている人に購入して貰えることが幸せなんです。」
本を我が子のように想う愛書家の営む古本屋は、温かみがあり、まさに五台山という名にふさわしい書房であると思った。

谷口瑞枝（67回生）
インターネット古書店、五台山書房を運営されている鍋島さんに書店を開設された動機や現在の商売繁盛振りについてお話を伺いました。
私達が伺った時にはすでに鍋島さんが五台山書房のサイトの全ページコピーと、購入を希望するお客さんから届いたメールをコピーしたものを用意していてくださり、私達がインタビューをすることになっていたのですが、その必要もないほどに鍋島さんは裏話や苦労話をして下さいました。お話を聞いているだけでどれだけ本を愛していらっしゃるか、どれほど五台山書房の運営に熱意を注いでいるのかが分かります。

五台山書房　ホームページ　http://www.ni.bekkoame.ne.jp/godaisan/

五台山書房へ入店（アクセス）すると、書籍は出版社別に分類されたリストを見ることができます。リストでは書名、著者名、出版年、価格はもちろん、新品同様か、汚れがあるのかといった本の状態までもが分かるようになっています。これは他社にはなかなかないサービスです。鍋島さんは手に取って商品を見ることのできないお客さんのことを第一に思っていらっしゃるのです。さらに私がお客さんへの対応で驚いたことは、お客さんが探している本を親身になって探されている、ということです。

書籍を購入したい人はメールやファックスで連絡をすることになっているのですが、その中には探している本があるといって、五台山書房のリストには載っていない書名を書いている人が少なからずいます。そうすると鍋島さんは他の古書店を歩きまわって探したり、それでも見つからない時は国会図書館に出向いてコピーをしたりと、本探しの代行をされているのです。（著作権上、本は1度にコピーできるのは半分以下、よって2回も出向いてコピーされているそうです）そして「最近は自分の欲しい本だけでなく、お客さんの本も探さないといけないから大変だ」と、それも嬉しそうにおっしゃるのです。私も本を扱う仕事をしているのですが、ここまで本を探している人のことを思ってあげているのだろうかと考えさせられました。

鍋島さんはご自身がほんとに本が好きだからこそ本が好きな人のことはほっておけないし、読みたい本を手にしたお客さんの喜ぶ気持ちがよくおわかりになるのだろうと思います。鍋島さんの暖かいお人柄にふれて、なんだか幸せな気持ちになれたインタビューでした。

お悔やみ申し上げます

平井康三郎（5回）02・11・30
北岡龍海（5回）02・12・9
山崎　晋（18回）03・5・12
津村昭典（22回）02・11・25
山脇敏弘（33回）02・1・3
山崎一夫（40回）02
藤田昌宏（40回）03・5・13

逝きし友そぞろ偲ばる

吉野保徳（31回生）

一昨年、昨年と続けて土佐高時代からの友人が逝った。植田崇君、秋澤穣二君の両兄である。

二人とも付属中学から土佐高に編入してきて私と同じクラスになったのだが、対照的な性格ながらそれぞれにユニークな存在だった。

植田君は、「まっすぐなグラフはわかるけど、土佐高へ来たらいきなりグラフが曲がっちゅうきにわけがわからん」と言って数学は全く省みなかったが、2年の時だったか、当時問題となっていた「チャタレイ夫人の恋人」を入手してきてクラス内で廻し読みをするなど早熟な文学青年といった風情があった。

秋澤君の印象は「意思の強い人」というにつきる。一緒に酒を飲んでいても、9時頃になるときりあげて帰宅し受験勉強をする。学校側のお仕着せの修学旅行に飽きたらず、有志をつのって足摺岬への第二修学旅行を企画する。東大へ何人、京大へ何人、という学校側の進学プロパガンダに反旗をひるがえし、自分の将来を見すえた一橋大学に進学する（その影響で同期生には一橋出身者が多い）。

植田君は、山田五十鈴を理想の女性としていて学生時代だったか中野近くのバーのマダムが山田五十鈴に似ているといって、何度か一緒に行った。大学を卒業して銀行員となったころ、大阪の帝塚山にいて、帰省の折りに大阪により、テッチリで一杯やったこともある。しかし彼ほどユニークな男に銀行マンが勤まるわけもなく、間もなく独立して経営コンサルタントになった。

秋澤君は、ほぼ一貫して伊藤忠の財務部門を歩み、大変忙しい一生だっただろうと推察する。最初の吐血をしたのも、ユーロダラーによる資金調達にかけまわったヨーロッパ移動駐在員の仕事から帰国して間もなくのことだった。そんなわけで社会人となってから、彼とゆっくり酒を飲んだのも45才をすぎてからのことではなかったかと思う。同期会の幹事の引継ぎだとか、ゴルフ会の打ち合わせ等の名目で、何かにつけて一緒に酒を飲んだ。

そしていつの頃からか、植田君から「今夜、秋澤と3人で一杯やろうや」という声がかかるようになった。勿論私に否のあろうはずもなく、この3人で一杯の飲み会は晩年まで続いた。

思えば高校入学以来の両兄とのつきあいだから、ほぼ半世紀のつきあいである。私の大好きな寮歌は、「天（あめ）にきらめきの星は語ひ、大地（つち）はほの香りささやくけれど玉の緒はつなぎもあへず逝きし友そぞろ偲ばる」と歌う。

こうしていると、植田君から「今夜、秋澤と3人で一杯やろうや」という電話がかかってきそうな気がするのである。

籠尾良雄先生の思い

関東支部幹事長　市川直介（53回生）

右文尚武の理想
　ひたぶる全力疾走
純白の土佐
　とわに輝け

籠尾良雄先生は、30年間にわたり、土佐高野球部の監督をなされ、その後高知県のみならず全国の青少年の野球育成のためにご尽力され、平成14年11月23日、享年68歳でご逝去されました。

冒頭の詩は、籠尾先生が土佐高野球部監督を引退されるときに読まれた詩です。この詩を読み返すと、先生が土佐高において、高校野球の理想を追い求め、教え子とともに全力疾走された姿が昨日のように目に浮かびます。籠尾先生の指導の下、土佐高野球は、全国の高校野球のファンの心をつかみました。土佐高野球部が甲子園に出場すると、甲子園球場全体が暖かい拍手でつつまれます。また、籠尾先生自身も指導者の模範として、多くの高校野球指導者から高校野球についての教えを乞われていました。

私が野球部に所属していたころも、玉川さん（慶大・日本石油）を中心とした強力打線と同級生の片田君（法大・NTT）や伊藤君（同大・東京電力）の両投手の活躍で、春の甲子園大会優勝の高知高校等を破り、夏・春連続して甲子園に出場しました。高知県下で一番の進学校でありながらも、春の甲子園はベスト8まで進みました。

籠尾先生は、甲子園出場だけでなく、卒業生として東大野球部や慶大野球部に多くの主将を送り出すとともに、医師や法曹等各界で活躍する人材を育てています。

籠尾先生は、グランド内にある「右文寮」に隣接する家屋に住まわれ、朝6時に始まる8キロのランニングから、夜10時に終わる補習授業まで、全力で生徒の指導をされていました。私が高校生のとき、何かの用件であまり近づきたくなかった社会科職員室に昼休みに行ったときのことです。籠尾先生は、社会科の担任にもかかわらず、弁当を食べながら英語の参考書を開いて勉強していました。夜8時から野球部員に行う英語の補習の準備をしていたのです。寸時を惜しんで生徒のため努力する籠尾先生の後姿は、今でも私の目に焼きついています。

監督を引退された後、土佐高の教頭の職や高野連の役職につかれ、土佐高のみならず高知県・全国における野球の発展のためご尽力されました。

私も、籠尾先生の教え子の一人として、冒頭の詩に込められた籠尾先生の思いを実現できるように、土佐校そして野球部の発展のため微力ながら尽力したいと思います。

籠尾先生、長い間ご苦労様でした。そして、本当にありがとうございました。

第48回選抜高等学校野球大会にて（1976年）

平井康三郎さん（5回生）

（平成14年11月30日ご逝去）

「とんぼのめがね」や「スキー」など、誰もが知っているメロディーの生みの親。童謡だけでなく千五百もの校歌や企業の社歌、県民歌を生きのいいリズムで量産した。

東京音楽学校（現・東京芸大）時代にドイツの名指揮者プリングスハイムからたたき込まれた基礎は、音楽家としての権威ではなく、むしろ生来のエンターテインメント精神をいっそう輝かせた。85歳の時、自らの歌曲を自ら歌ったリサイタルをCDで聴くと、1曲ごとに張りのある声で解説し、笑いとともに巧みに聴衆をひきこんでいる。「舞台の上ではサービス精神のかたまり」と孫の元喜さん。

しかし、バイオリンや声楽の弟子たちは「厳しかった」と口をそろえる。旋律に酔って言葉や伴奏をなおざりにすることを、自らにも、そして他人にも、許さなかった。

書斎にこもることは少なかった。「平城山」の名旋律は、駅のホームで生まれた。90を超えても、ひとりで新宿界隈を歩き回った。最新のスクラップ帳には、宇多田ヒカルやBSデジタル放送まで様々なジャンルの新聞記事がずらり。イラストと俳句が得意で、好きな番組は「笑点」だった。好奇心たっぷりに、おおらかに、人生を楽しんでいた。

今年に入り、肺炎で入退院を繰り返した。看護士が励まそうと「とんぼのめがね」を歌ったら、「テンポが遅い！」とおどけて返した。

亡くなるその日、病室にはとりわけお気に入りだった自作「ゆりかご」のCDが流れていた。ふいに目をあけ、ほほ笑んだような表情のまま両目からスーッと涙を流し、付き添っていた長男丈一朗さんの妻、美那子さんを驚かせた。そのまま、昼寝でもするかのように穏やかに逝ったという。

（平成14年12月16日朝日新聞夕刊記事「惜別」より）

北岡龍海大先輩（5回生）を悼む

山本高敬（25回生）

前同窓会関東支部長で筆山会前会長の北岡龍海先輩のご逝去を心からお悔やみ申しあげます。

北岡先輩は東京帝国大学卒業の理学博士で初代の気象大学校校長を務められ、高層気象学とくにオゾン層研究の権威者で宇宙開発事業団でも活躍なさいました。晩年も暇もてあますことなく勉強に励んでおられ、「もうこの歳で無理じゃと断ったが、押し付けられて・・・」とアメリカ・バージニア大学での「国際オゾン学会」で講演をされたのがなんと80歳を過ぎてからと、歳を感じさせないご活躍ぶりでした。

写真1

今も続けられている、月例昼食会「筆山会」が第1回卒業生の佐藤・島野両先輩をはじめ土佐中学開校初期の錚々たる先輩の集いとして、銀座の交殉社で行われていた頃、その末席に参加させていただき初めてお目にかかったのは昭和45年頃だったでしょうか。それ以来30数年間、同窓会以外でもあるときは関東高知県人会で、あるときはゴルフ場で気軽にお付き合いくださいました。「山本君、俺は5回生だが25回生の仲間に入れてくれんか?」なんて冗談を言っておられたほどで、弟、いや息子のように可愛がっていただきました。何時も溌剌・颯爽とされ、しかも決して出しゃばらない温厚な人柄は誰からも愛され親しまれた先輩でした。

ゴルフはとてもお好きでいらっしゃいました。筆山会のゴルフは歴史が古く、宮地支部長がまだ若手のころ幹事役で始められ、一時中断していたのを復活し、当時熱中していた北岡先輩が会長として再開されましたが、これが毎回必ず雨にたたられていました。気象博士のコンペがこれじゃいかんと、早速気象庁に駆け込み気象データを手に入れ「次回からはこのデータによって日程を決める」と言われ、その後は「筆山会は雨」のジンクスは消え、会長もほっとされていました。筆山会の優勝カップが北岡杯となったのは一九八九年で私が先輩から頼まれてカップを買ってきました。ところが図らずもその第1回の優勝者が私で、会長から「山本君こりゃ、落語の花見酒じゃなあ」と大笑い（写真1）、また、少しの酒量でとても陽気になられる方で、一九九五年近藤先輩（6回生）のお声掛りでなんとなく集まった池袋のはりま家の二階で歌いまくったことでした（写真2）。

向って左が北岡さん、右は筆者

思い出は尽きません、いずれは来るとは覚悟はしておりましたが、かけがえの無い大先輩を失ったことが残念で残念でなりません。先輩が愛した母校、同窓会をずっと遠い空からお見守りください。北岡さん本当にありがとうございました。では、さようなら。

合掌

■展覧会案内

田島征三（34回生）

■田島征三・全部てんらん会
日程　6月1日（日）～
　　8月31日（日）
会場・問合せ先
池田20世紀美術館
（静岡県伊東市・一碧湖）
静岡県伊東市十足字関場六一四
TEL 0557-45-2211

■田島征三展
日程　7月26日（土）～
　　8月10日（日）
会場・問合せ先
ギャラリー由芽
東京都三鷹市下連雀4-15-2一〇一
TEL 0422-47-5241

■田島征三・田島燃2人展
日程　9月19日（金）～
　　9月28日（日）
会場・問合せ先
星ヶ丘アートヴィレッヂ
高知県高知市横内一五三一一
TEL 0888-43-8572

向井隆豊（44回生）

■第7回千葉常磐独立展
日程　7月19日（土）～
　　7月23日（水）
会場・問合せ先
アートスポットまつど
伊勢丹松戸店新館9F
TEL 047-361-2549

■第71回独立展
日程　10月16日（木）～
　　10月31日（金）
会場　東京都美術館

週刊朝日「日本の名門高校ベスト一〇〇　私立中・高校編」に土佐中学・高等学校が登場

週刊朝日6月13日号に特集記事で9ページに及び土佐中・高等学校が紹介されました。建学の精神はもとより進学のこと、白線余話、大島校長と終戦処理・戦後の復興、甲子園出場、運動会の櫓等、詳しく紹介されています。

特筆すべきは一二〇におよぶ土佐中・高校OB先輩諸氏による協賛広告の数の多さで、同シリーズの他校の協賛広告数をはるかに凌駕しておりました。

先輩諸氏の土佐校に対する深い愛着がうかがえました。

〔編集部記〕

ふるさとへの手紙（一）

早稲田大学三年　山﨑寛子（76回生）

早いもので上京して3年目に入り、大学生活も折り返し地点を過ぎた。一年生の頃は、早稲女（ワセジョ）という言葉を聞く度に萎え、「～じゃん」としきりに言っていると「何かおかしい…」と指摘され、右も左も分からなかった東京の生活に慣れることで精一杯だった。

ちょうど一年生の今頃（5月の半ば）、中・高と所属していたバドミントン部の集まりが新宿であった。慣れない一人暮らしと新しい人間関係に悪戦苦闘していた時期だけに、久々に懐かしい先輩、友達に会うことで何ものにも代え難い安堵感を得られたことを覚えている。

バドミントン部の仲間と。全員76回生。

大学のゼミ仲間と教室で。前列左が筆者。

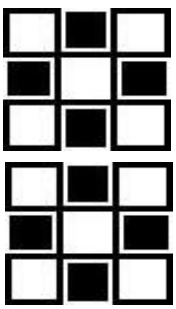
集まりもお開きになり、最後に先輩が「お疲れさま、じゃあまた1年後！」と言った。それを聞くなり「えっ、1年後？！もっと集まりましょうよ！」と叫んでしまった。

それから1年経ち、また1年。先日3回目の集まりに参加してきた。自分も含め皆こちらの暮らしに慣れ、それぞれに忙しい日々を送っている。2年前の先輩の言葉も納得できた。皆が予定を合わせて会うのには、確かに1年に1度ぐらいがちょうど良いだろう。

しかしなぜ、こんなにも土佐弁を交え、飲み、笑うと元気が出るのだろうか。汗と涙を共に流した仲間とはもちろんのこと、土佐高同窓会をはじめ、こちらに来て親しくなった同級生や先輩方と会い、土佐弁を用いて談話することは、私にとってエアーフレッシュナーより癒しの効果をもたらすのである。というと少し大げさかもしれないが、とにかく、こちらの暮らしに別段悩みは無くとも土佐人と交流することは精神的に元気になれるのである。

最近では、親しい友達の前や感情的になると土佐弁が出るようになった。上京3年目にして改めて、土佐のことばを、また自分が高知出身であることを誇りに思い、大切にしたいと思う今日この頃である。

新入生、それから土佐校のみんな、高知を離れても土佐弁を忘れたらいかんで。



36回関東同窓会開催

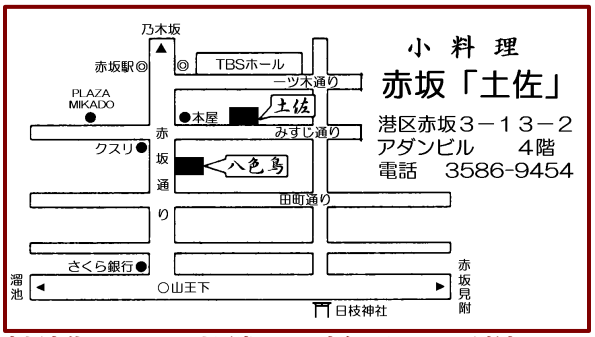
幹事　下司芳嗣（36回）

平成15年度の36回生の関東同窓会を3月7日（金）九段のホテルグランドパレスで開催した。関東在住者約百名のうち31名が出席した。今年初めてEメールによる応答を試みたが「安くて、速くて、確実」と概ね好評であった。

本年度の幹事安岡顕一氏の開会の辞に続き、同窓会会長の竹内一郎氏が挨拶し「還暦を無事に過ごした今だからこそ一層気力を充実させて日々努力してゆきたい」と述べ共感を得た。物故者への黙祷のあとバイキング料理で懇親、歓談に入った。

今回は高知から代表幹事の北岡顕史氏が特別参加され、土佐高の近況報告、同窓会の概況報告等を行ったが席上、「次回36回生の全体総会を二〇〇五年に関東地区で開催したいので関東同窓会で担当して欲しい」旨要請があり出席者の了承を得た。

来年度の幹事選出の後、関西支部より参加の中塚望氏の熱烈指導で肩組み合って校歌・応援歌を斉唱し、来年度の再開を約して2時間余の懇親会を終了した。



小料理
赤坂「土佐」
港区赤坂３－１３－２
アダンビル　４階
電話　3586-9454

赤坂土佐のマスター小原尚さんは本年6月19日にご逝去されました。
土佐中・高同窓会関東支部一同衷心よりお悔やみ申しあげます。

スマートな いごっそう

二十四回生　山中和正

道祖神の誘い（いざな）

「道祖神」は道端にあって悪霊や疫病を防ぐ神である。小さな石像でひっそりと立っているのを見かけることがある。松尾芭蕉は「奥の細道」の書き出しに、『道祖神のまねきにあいて取るもの手につかず（旅に出る）』と記している。

私も芭蕉同様、時々道祖神の誘いを受ける。・・・というのは気障な言い方で単なる旅好きである。昨年12月、後輩の浅井利子道祖神（35回生）の誘いを受けて、アフリカのガーナまで足を伸ばした。

「私は午（うま）年生まれの馬です。午年の今年、私は本当の馬――ヤジ馬になります！」　ガーナの首都アクラの質素なレストランで開かれた『高知県人会』の席で私はこう宣言した。「よさこい・イン・ガーナ」に駆け付けた土佐高35回生を中心とする20人のサポータ達を、在留邦人の関係者が迎えた歓迎会の席である。そして、翌々日、お祭終了後の打ち上げ会で、「馬になろうとしたのですが、熱気に引き込まれて馬を通り越して鹿になってしまいました。踊るアホウという馬鹿にです」と告白した。

ガーナの若人の踊るヨサコイ・ダンスは圧巻であった。五〇〇人を超す踊り子と、二〇〇〇人の観客が会場の広いチルドレンズ・パークを埋め尽くし、大音響でエンドレスに流れるよさこい音頭のメロディに乗ってアフリカ調の激しい踊りが繰り広げられた。メロディはよさこいであるが、リズムはビートの強いサンバかロックである。そのさまはペンや静止画像では伝え難い。「日本の恥になるから」と踊るのを躊躇していた私ですら、チームの秩序を乱しながらメチャクチャな踊りを披露してしまったことからもその熱気が伝わることであろう。

どこかで食べたものでも悪かったのか、張り切り過ぎて疲れが出たのか、帰りの機中でお腹の調子が悪くなり、乗り継ぎのロンドン空港でトイレに駆け込み、私のテリトリーを示す汚物のＤＮＡをしっかり残してきた。こうして私はとうとう行った先に印をつけてくる犬になって帰ってきた。馬が犬になってしまったのである。うちには戌（いぬ）年生まれの家内という犬がもう一匹いたので、これで我が家は犬だけの水入らずのスイートホームになった。

今年、南極にまで足跡を残した私であるが、まだまだ行きたいところが沢山ある。人類文明の発祥地のひとつメソポタミア（今のイラク）、世界一の落差を持つエンジェル・フォールなど望みは多い。身体が自由に動くうちに訪れたいものである。

いごっそうの一言

『月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり。・・・』　有名な「奥の細道」は西野友彦先生の授業で教わった。終戦直後、焼け跡瓦礫の中でである。物資不足で教科書もなかった。校長がどこからか手に入れてきた仙花紙と称するちり紙みたいな紙に、西野先生が自分で鉄筆を握って原紙を切ったガリ版刷り手作りの教科書である。『おとこもすなる、にきというものを・・・（紀貫之、土佐日記）』『ゆく河の流れは絶えずして・・・（鴨長明、方丈記）』など日本文学の名作を次々と教材に取り上げた。このトモちゃんの国語に限らず、カマスの数学、オンカンの生物、松浦先生の英語など物資不足の悪い環境で教わった学問の方が身についたような気がするのは、私がいごっそう――へそ曲がりだからだろうか。

授業中の松浦先生（昭和21年頃）

イタリア城廻りの旅

ミケランジェロの丘より眺めるフィレンツェの街

鳥の羽城塞（サン・マリノ）

西内　一（30回生）

今なお連綿と続く30回Oホーム・クラス誌「うきぐも18号」にて、「三人組登城」との記事をご記憶の諸兄も少なくないことと思うけれども、私共が（財）日本城郭協会の運営を始めた経緯はこうである。

ご兄弟協力してルイ・ヴィトン高知をオープンさせた松崎郷輔君（30回）が、実弟秦郷次郎君（31回）のメセナ活動には及ばないものの、高知東ロータリークラブを通しての社会奉仕からさらに一歩進めてみたいとの意向をうけて、教育、文化界に顔の広い中城正堯君（30回）が、永年理事を勤めている城郭協会は、文部科学省生涯学習政策局所管の公益法人なので、意義深いのではないかと応じ、その運営に当たることとなった。

とは言うものの、三人組だけでは到底力不足なのだが、そこは土佐高OB多士済済である。早速、泉谷良彦先輩（29回）が役員として参画して下さったほか、評議員として法曹界から堀内稔久君（32回）、教育界からは宇田理夫君（36回）、わが30回Oホームからは久良木元司、前田憲祐君などが加わってくれた。またこのほか、山中和正先輩（24回）を始め、宮川洋治君（33回）、公文敏雄君（35回）、鶴和千秋君（41回）など大勢の諸兄が会員として参加してくれた。

コスタンツァ城塞（サン・レオ）

前置きが随分と長くなったけれども、この協会がイタリア城郭探訪に出かけることとなった。さて、ここでもわが土佐高は人材豊富である。案内役には最適の藤宗俊一君（42回）が居るではないか。関東支部HPにリンクしている彼のHPを開くや、イタリアの城郭、教会など夥しい建造物がたちまち現れるではないか。

イラク戦争、SARS騒動など旅行への障害があったものの、そこは土佐高OB、藤宗先生ご案内となると、あっという間に20名の参加者が集まった。

かくして、5月19日からローマを振出にフィレンツェ、ラベンナ、ヴェローナなどを巡ってミラノへ抜ける11日間の旅が始まった。

ベッキオ城（ヴェロナ）

旅は幸い好天に恵まれ、ジャルパックの貸切バスで初夏のトスカーナのゆったりとした丘陵を登り下りし、果てしなく広がるロンバルヂア平原を幾時間も走って、今なお城壁の残る古都を回り、急峻な山頂城にも思う存分登城できた。

裏切りもんがいっぱい!!! ＶＩＰ（Very Independent Persons）の晩餐。上段右端が筆者。

連日の城廻りにも拘わらず、藤宗先生の巧みな話術によるワイン案内で、昼・夜続けて白・赤ワインをたっぷり堪能

スフォルツァ城塞（イモラ）

できたお蔭で、疲れも忘れる旅となった。

旅の一番のハイライトは、なんと言ってもフィレンツェで藤宗先生若かりし頃の下宿を訪ね、なんとその1階にあるレストランでこれぞイタリアと言う料理を賞味出来たことだ。また、白ワインゆかりの城として、彼がつとに推奨したソアベ城下では、そのワイナリーまでも探訪して、城を望む期待通の酒盛りもできた。

山中先輩は一番お元気だったし、泉谷先輩は、奥様の傍目も羨むサポート宜しきを得て全てのお城に登城されたし、腰痛の不安を抱えての参加であった大町玄君（30回）も何事もなく完走することが出来て、大喜びであった。

総じて、今回のイタリア城廻は「ガーナでよさこい」にも比肩し得る卒業年次をこえて纏まった楽しいＯＢ会旅行であったと言えよう。

向陽プレスクラブ懇親会

日時：平成15年4月25日（金）
場所：オ・コション・ローズ
出席者：細木大麓・岡林幹雄（27回）浅井伴泰・中城正堯（30回）濱崎洸一（32回）秦洋一（34回）公文敏雄（35回）藤宗俊一（42回）

復活第2回の今回は、会場が恵比寿の有名レストラン（中城がオーナー・シェフ夫妻の媒酌人）であったため、恐れをなしたという訳ではないだろうが、所用や病気で欠席者続出。少人数の集まりとなったが、談論風発。そのうち若干を紹介すると…。

浅井夫人（35回）が、ガーナ大使として両国親善のために発案した『ガーナよさこい踊り』が昨年末開催され、公文が賛助出演。浅井と共にアフリカの大地に土佐高の旗を立てた話。『よさこい踊りは高知を起源とし、今や日本各地で行われているフリースタイル・ジャパニーズ・フォークダンスであり、ガーナ某地方の伝統的踊りによく似ている。』との解説を載せた現地新聞と共に、当日の盛況振りを伝える写真が披露され、一同臨場感を味わうと共に、激務の大使を旦那はチャンと支えるとの意見あり。浅井からの「明日は弘前の桜を見に連れて行く。チャンとしゆうきに。」との発言に、まず一安心。

岡林

山川令子（36回）の身代わりで出馬した令嬢が、先日の埼玉県議選で見事当選の報に、山川の身を案じつつも、一同祝福。今後の活躍を祈念する。

故岩谷清水（27回）や戸田博之（38回）を偲んだ想い出の中に、戸田が2度目のブラジル駐在時に、集団スリに取り囲まれたが、スリの親分が戸田の顔を見るなり、「セニョール、俺を覚えて居ないか。俺がまだガキで靴磨きをしていた頃に、セニョールは毎日俺に靴を磨かせて呉れて、充分な代金を払ってくれた。その事は忘れない。」と言って、子分達を「このセニョールは大事な人だ。この人からは盗るな」と叱ったという話。1度目のブラジル駐在から随分時間が経っている（子供の靴磨きが、大人になって、しかも集団スリの親分になるまでの時間）のに、チャンと忘れず恩に報いたとは律儀な振舞いであったと、感心すると共に、生前の戸田の人柄の一端に触れたようで、一同合掌。

濱崎が日本水泳連盟の各種要職を担っていることは、周知の事実だが、これが手弁当で、ボランティア。古橋会長の側近としての苦労話や次回オリンピックへ向けての決意表明あり。期待してよさそう。

ボランティアといえば、近く中城が仲間とゆくイタリア旅行で、藤宗が講師として同行し、イタリア美術や建築につき解説することとなり、目下イタリア語をブラシュアップしているとの話。『トシをとるとなかなか思いだせんもののじゃが、それはエライ』と細木と岡林が、感心することシキリ。建築の話では、中城から江戸城天守閣再建構想の披露あり。なかなか夢が大きい。

右から藤宗、中城、細木

最後は、例によって母校振興、その為には池上校長を中心とする先生方の一層のご努力をお願いしたいと、これは意見が一致。病気の方は早く快くなられるよう。一年後の会合には、多数の参加を期待する。

（文責　岡林）

左から濱崎,浅井,公文

★出版レーダー★

大原健士郎（24回生）
「心が強くなるクスリ・森田式健康法ノート」
三笠書房　本体五三三円　2002.12
「自殺」（子どもをとりまく問題と教育11）
開隆堂出版　本体二三〇〇円　2003.02
倉橋由美子（29回生）
「パルタイ・紅葉狩り」
講談社　本体一二〇〇円　2002.11
黒鉄ヒロシ（41回生）
「赤兵衛」
小学館　本体一五一四円　2003.06
合田佐和子（34回生）
「合田佐和子」（展覧会図録）高知県立美術館　2001.02
塩田潮（40回生）
「田中角栄失脚」
文芸春秋　本体八六〇円　2002.12
田島征彦＆田島征三（34回生）
「ゆきちゃんせいちゃん往復書簡」
高知新聞企業（発売）本体一八〇〇円　2003.01
田島征三（34回生）
「オオカミのひみつ」偕成社　本体一四〇〇円　2003.05
「きみはナニを探してる？」
アートン　本体一五〇〇円　2003.05
西村繁男（40回生）
「だんだんやまのそりすべり」
福音館書店　本体一一〇〇円　2002.11
坂東真砂子（51回生）
「相土家の猿嫁」
講談社　本体八一九円　2003.01
「13のエロチカ」
角川書店　本体五一四円　2003.02
「愛を笑いとばす女たち」
新潮社　本体四〇〇円　2003.06
森岡浩（55回生）
「プロ野球人名事典」
紀伊国屋書店（発売）本体三三〇〇円　2003.04
廣瀬裕子（60回生）（訳：高遠裕子）
「セス・ゴーディンの生き残るだけなんてつまらない！
セス・ゴーディンの未来を拓く」
早川書房　本体一九〇〇円　2002.11
「巨象も踊る」
ルイス・ガースナー著　高遠裕子訳
日本経済新聞社　本体二五〇〇円　2002.12
「経営は『実行』明日から結果を出すための鉄則」
ラリー・ボシディ著　ラム・チャラン著　チャールズ・
バーク著　高遠裕子訳
日本経済新聞社　本体一八〇〇円　2003.02
鍋島高明（30回生）
「相場師異聞：一攫千金に賭けた男たち」
河出書房新社　本体二〇〇〇円　2002.12
大塚寿昭（43回生）
「コーポレート・セキュリティ：IT時代の企業情報リ
スク管理」
ダイヤモンド社　本体一八〇〇円　2001.03
岡村甫（32回生）
「Nonlinear mechanics of reinforced concrete」
Spon Press　一八六一〇円　2003.03
宮岡等（49回生）〈絵修〉
「育児不安：特別企画」
大日向雅美編　本体一二三八円　2002.05

ここからは雑誌に掲載されています

大橋一章（36回生）
「記念講演会 会津八一と早稲田大学の美術史」
建築史学　39　14-24　2002
大原健士郎（24回生）
「MEDICAL ESSAYS 自殺予者シュナイドマン博士の思い出」
日本医事新報　4100　41-43　2002
「MEDICAL ESSAYS 忘れえぬ先輩」
日本医事新報　4092　45-47　2002
「クリニカル 歯科医と精神医学的疾患」
日本歯科医師会雑誌　55(6)　496-501　2002
公文俊平（28回生）
「パネル討論 自然科学と人文科学による共創を目指して
（公開シンポジウム 21世紀IT社会の健全な発展に向けて
――自然科学と人文科学による共創を）」
電子情報通信学会誌　85(1)　29-39　2002
黒鉄ヒロシ（41回生）
「じつは肉襦袢だった（特集 小泉ブームは終わったか）」
Voice　293　71-73　2002
塩田潮（40回生）
「提言 郵政三事業の民営化に向けて」
IMFJC　270　32-37　2003
「緊急レポート 日本再生へ胸張って『一兎を追うべし』
竹中平蔵経済全権大臣の可能性と限界」
ニューリーダー　15(11)　8-13　2002
「地方のリーダーが日本を変える(4)福田富一・宇都宮
市長「出前政治」で自立の時代創造を目指す 異色の市
長が描く『人の住むまち』づくり」
ニューリーダー　16(3)　48-52　2003
「地方のリーダーが日本を変える(3)増田寛也・岩手県
知事 経済的自立なくして『真の自立』はありえない 広
域連合に賭ける改革派代表の大いなる夢」
ニューリーダー　16(2)　28-32　2003
「地方のリーダーが日本を変える(2)片山善博・鳥取県
知事――『直球勝負の正論技法』で中央官庁に挑む 政策
具体化のシナリオと戦略が2期目の課題」
ニューリーダー　16(1)　42-46　2003
「地方のリーダーが日本を変える(1)全国各地に起こる
『新しい実験』への挑戦 中央主導を脱し自主自立の地方
分権目指す」
ニューリーダー　15(12)　38-42　2002
「新世紀の風貌(68)日本郵政公社初代総裁・商船三井会
長 生田正治――郵貯・簡保三五八兆円、30万人の職員を
抱える巨大組織は改革できるのか 郵政改革に挑む『規制
緩和の論客』」
プレジデント　41(1)　14-21　2003
「Focus政治 小泉流買いた内閣改造。際立つ小泉の強さ」
週刊東洋経済　5788　98-99　2002
「Focus政治 小泉政権に迫る賞味期限切れ」
週刊東洋経済　5793　122-123　2002
「田島征三――木の実が作る物語（総特集 絵本の世界――
作家を訪ねて）」
ユリイカ　34(3臨増)　40-48　2002
野田正彰（37回生）
「『心のノート』の危険性（特集 「心のノート」の検証）」
人権と部落問題　55(1)　7-13　2003
「インタビュー『させられる教育』から『教育基本法改
正』へ――野田正彰さんに聞く」
人間と教育　37　94-105　2003
「心のノート 『心の教育』が学校を押し潰す」
世界　706　88-100　2002
「させられる教育、途絶える教師（最終回）造られたマー
ケット――指導力不足教員」
世界　699　239-252　2002
「させられる教育、途絶える教師（第4回）湧き起こる全
体主義」
世界　698　181-194　2002
「させられる教育、途絶える教師 第3回 国家主義のダ
イナミズムに乗って」
世界　697　282-295　2002
「対談 戦争責任から管理教育まで」
新日本文学　57(10)　30-41　2002
坂東真砂子（51回生）
「柴田錬三郎賞受賞記念エッセイ 日照り」
青春と読書　38(1)　2-5　2003
森崎初男（41回生）
「経済学・経済政策」
企業診断　50(4)　110-114　2003
「経済学・経済政策 課税の余剰分析（コンサルタント養
成セミナー 経営診断ポイント講座(21)）」
企業診断　50(2)　110-112　2003
「経済学・経済政策 市場経済と社会的余剰（コンサルタ
ント養成セミナー 経営診断ポイント講座(19)）」
企業診断　49(12)　111-113　2002
「経済学・経済政策（コンサルタント養成セミナー 経営
診断ポイント講座・特別編――中小企業診断士 試験ガイ
ダンス(1)試験科目の出題傾向と学習のポイント）」
企業診断　49(10)　114-116　2002
宮岡等（49回生）
「こころの危険信号 自分で感じる症状（特別企画 こころ
の病気のセルフチェック――こころの病気の自己診断と
は）」
こころの科学　106　30-34　2002
「味覚閾値と抑うつの程度」
心身医学　42(3)　217-224　2002
「シンポジウム2：歯学・薬学・看護学教育の改革と医学
教育との連携（特集 第34回日本医学教育学会大会記録）」
医学教育　33(5)　290-293　2002
岡村甫（32回生）
「新設大学の試み（今月のテーマ 「大学のトップマネジ
メント」を語る）」
IDE　446　70-72　2003
「理想の大学づくりに向け大学経営の改革に挑戦する――
トップ主導で教員評価システムを構築して（特集 大学
経営革新の新潮流）」
JMAマネジメントレビュー　8(11)　9-12　2002